
氷解

栗原峰幸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

氷解

【Nコード】

N3994I

【作者名】

栗原峰幸

【あらすじ】

栄太郎は帰帆市役所に勤める生活保護のケースワーカー。彼は佐々木律子という母子家庭を自立させようと躍起になっていた。だが律子の態度は煮えきらず、ある日、福祉事務所に内緒で居酒屋で就労しているところを目撃されてしまう。不正受給扱いはせず、何とか「本当の自立」への支援をしていくうちに栄太郎は律子にほのかな恋心を抱いてしまう。休日に公園で会う栄太郎と律子親子。だが市民と名乗る人物から福祉事務所に通報が入る。栄太郎と律子が仕事を外れ、密会していると……。律子の本当の気持ちを確かめ、

栄太郎は本当の貧困とは人の心の中に巢食つ闇にあることを知る。

第一話

「だから、何度も言っているじゃないですか。来月の保護費で今月の過払いを調整させてもらうって」

市役所の一室の電話口で、栄太郎は口を尖らせた。その口調は懇願するようではあっても、栄太郎の顔は鋭く電話を見つめている。その瞳はどこか恨めしげだ。

「だから、来月の保護費は今月より少なくなります」

栄太郎がそう言った途端、離れた距離でも罵声とわかる声が受話器から漏れた。栄太郎は苦虫を潰したような顔を見ると、メモ用紙に書いた丸を黒く塗りつぶし始める。

「収入があつたんだから仕方ないでしょう。それとも何ですか、収入を申告しないで不正に生活保護を受けた方がいいとおっしゃるんですか！」

今度は栄太郎が声を荒げた。事務所の空気に緊張が走る。その緊張を解いたのは、ほかならぬ栄太郎であった。

「あなたがそんなことをできないことは、僕が一番よくわかっていきますよ。ね、今月は収入があつたんだし、やりくりしてください。

働き始めることはいいいことじゃないですか。自立の助長が生活保護の目的なんですから、頑張ってくださいよ。応援していますから」

そう言い終え、栄太郎は受話器を置いた。そして、「ふう」と軽いため息を漏らすと、ぬるくなつたコーヒーを口に含む。砂糖もミルクも入れないブラックコーヒーの方が、ぬるくなつても栄太郎には飲みやすかった。栄太郎はそのまま電卓を叩いた。保護費はコンピューターが自動で計算してくれる。しかし、やはり手計算で確認してしまふ。そして調書を難しそうな顔で睨むと、「うーむ」と唸った。

「来月は大分、少ないな……」

栄太郎は記録紙にペンを走らせると、決裁欄に自分の印鑑を押し

た。そして、パソコンに向かい、数字を打ち込む。栄太郎の大きな瞳が線のように細くなった。

北島栄太郎はこの帰帆市役所に勤めて五年になる。大学を卒業してからすぐ市役所勤めをしているので、まだ二十七歳という若さだ。だがどこことなく、くたびれて見えるのはなぜだろうか。別に身なりが汚らしいわけでもない。風貌が老けているわけでもない。それでも彼にたちこめる匂いがくたびれているのである。いや、栄太郎だけではなかった。彼の所属している生活福祉課のほとんどの課員がくたびれた匂いを放っているのだ。

生活福祉課の主な業務は生活保護である。生活保護とは日本国憲法の第二十五条の生存権を具体的に保障する制度で、生活に困窮する人々に対し、無償で金銭等を給付する制度である。それは最低限度の生活が営めるレベルのものとなっている。

栄太郎はこの生活福祉課に来て二年になる。生活保護は通称「生保」とも呼ばれており、市役所の中でも不人気ナンバーワンの業務だ。それは常に追いつてられるように多問題な仕事如山積みになることばかりでなく、ケースと呼ばれる受給者や時には民生委員や近隣の住民からの苦情も多いからである。栄太郎は人事異動になった時、まだ生活保護のことを知らなかった。上司から「生保だぞ」と言われて、「市役所で生命保険を取り扱っているんですか」と問い返したほどである。

栄太郎は腕時計を見た。既に針は午後二時を指そうとしている。

「そろそろ、訪問に行くか……」

栄太郎は椅子の背もたれにかけてあった上着を羽織り、ビジネスバッグを無造作にひったくった。

「おう、北島、行ってくるか」

高橋係長が笑っている。栄太郎はいつも不思議に思うのだ。係長クラスともなれば、矢面に立たされることも多く、辛いことは多い。

それなのに高橋係長にくたびれた印象や悲壮感はどこにも漂っていない。栄太郎は自分でも、自分がどこかくたびれていることを自覚していたのだ。

「はい。佐々木を何とか働かせたいんですよ」

「そうだなあ。子どもを保育所に預ける算段までつけたんだから、何とか働かせたいよなあ」

高橋係長が椅子の背もたれに深く寄りかかって、栄太郎を眺めた。

「まあ、話をつけてきます」

「おう、頑張れや。気を付けて行ってこいよ」

栄太郎は口元に微笑みを浮かべると高橋係長に背を向けた。そして、公用車のキーを取りに行く。高橋係長はしばらく栄太郎の背中を追っていた。口元は少しニヤニヤと笑っている。階段へと続く扉は鈍い音を立てて、栄太郎を吐き出していった。

生活保護は最低生活を保障するとともに、自立の助長をその目的に掲げている。その目的のためにも定期的な家庭訪問を実施して個々の世帯の問題を把握することは必要不可欠なのだ。家庭訪問の頻度は問題が多ければ毎月となり、少なければ三ヶ月ないしは六ヶ月に一度となる。中には家庭訪問に拒否的な世帯もあったが、大多数が仕方なく受け入れてくれた。生活保護の地区担当員が財布の紐を握っていると思えば、家庭訪問を受け入れざるを得ないのが実情だ。これから栄太郎が訪問する佐々木律子という母子家庭は毎月訪問することとなっていた。母子家庭の場合、子どものことや自立の計画など問題も多く、栄太郎のような地区担当員は逐一状況を把握し、助言をする必要がある。

栄太郎は公用車に乗り込むと、キーを勢いよく回した。車庫に爆音が響く。

「ふう……」

ため息を一回つくと、栄太郎はハンドルを握った。そして、公用車はゆっくりと滑り出す。

栄太郎は律子の家に行くのが辛くもあり、楽しみでもあった。その相反する感情をどのように整理してよいのか自分でもわからないでいる。ただ幸いなことに、律子は家庭訪問をいつも快く承諾してくれた。

律子には健一という五歳になる息子がおり、健一は今、保育所に通っている。これも律子が働きやすいようにと、栄太郎が児童福祉課に話をつけ、無理矢理頼んだのだ。健一はもうすぐ小学校に入学するが、やや言葉が遅い。律子はそのことを心配しているが、母親として至極当然な感情だと栄太郎は思う。そんな律子の不安のために栄太郎は児童相談所や就学指導委員会へも出向いたりしたものだ。律子はそんな栄太郎にいつも感謝をしてくれている。

「だったら、働けよ……」

公用車の中で栄太郎が独り言を唸った。

そう、律子はなかなか働こうとはしなかった。それが栄太郎には、「生活保護に胡坐をかいている」としか思えなかったのだ。

(今日こそは、何とか「働く」って言わせてみせる……！)

栄太郎はハンドルをギュッと強く握った。そんな栄太郎の前に律子の笑顔が浮かぶ。すると、信号が赤に変わった。

「畜生！」

そして、栄太郎は「はあ……」と重いため息をつく。ハンドルから手を離れた。律子の微笑みは、いつも強力な指導を躊躇わせる効果が栄太郎にはあるのだ。律子が美しいということもある。だが、どこかほかのような脆さと芯の強さという、相反する面影を抱いた律子の雰囲気は、栄太郎の男心をくすぐって止まないのだ。支援する側と、される側。その関係以外の何物でもないのだが、つい不埒な妄想が頭を過ぎってしまう。

生活保護ではケースの生活歴を事細かに尋ねる。そこから問題を分析し、個人の社会診断を行うのだ。現に律子の母親、佐々木伸江も生活保護を受けている。伸江は保護費をパチンコや酒に注ぎ込むでは浪費することで、民生委員などからもよく苦情がくる、いわば

「有名人」だ。伸江はそれこそ、生活保護に胡坐をかいて生活してきており、働く意志など微塵にも見られない。そして、伸江もまた離婚していた。そんな環境の中で律子は育ってきたのである。

律子は高校へは進学せず、スーパーのレジ打ちとして働いていた。しかし、男性店員と仲良くなり、やがて妊娠。その店員には妻子がおり、結ばれる仲ではなかった。母親も無責任なもので、律子が妊娠五ヶ月になるまで、その兆候に気付かなかったという。結局、子どもを産むこととなったが、当然のことながら、不倫相手から認知してもらえないはずもなかった。子どもをめぐって律子は母親と対立するようになり、家を出る。臨月になるまで工場で働くが、出産と同時に退職。以降は無職となり、生活保護で生計を営むようになる。健一が保育所に入った今、律子に働けない理由はなかった。経済的な自立とまでいかなかったも、自分で収入を得て生活していく喜びを律子に味わってもらいたかった。貧困の再生産とよく言うが、このままでは親子二代にわたり生活保護を受け続けることとなる。その連鎖を何とか栄太郎は食い止めたかった。

栄太郎は公用車を古ぼけたクリーム色のアパートが見える空き地に停めた。そこからアパートまで歩く。アパートはいかにも寂れており、扉の前に乱雑に物が置かれている部屋もある。どこか昭和の匂いが漂うアパートだ。栄太郎は一番右端の扉の呼び鈴を押す。呼び鈴はしわがれた声で主を呼び出していた。

「はい」

明るい声が扉の向こうから返ってきた。佐々木律子の声だ。栄太郎の気持ちはまだ複雑だ。決心と不埒な期待が妙に入り交ざった落ち着かない気持ちでも言おうか。

律子が扉を開けると、屈託の無い笑顔が栄太郎の目に飛び込んでくる。

(しまった、やられた……！)

長いストレートヘア、大きな瞳、口元から覗く八重歯、そして頬

で窪むえくぼ、どれを取っても美しいではないか。栄太郎の男心が揺らぐのも無理はなかるう。

「すみません、ちょっとお話が……」

「ああ、どうぞ上がってください。相変わらず汚い家ですけど……」
「お子さんが小さいうちは仕方ないですよ。子どもは汚すのが仕事みたいなもんだから」

栄太郎はそそくさと律子の家上がった。普通、生活保護を受けている者は役所の者が来ることを嫌う。生活保護を受けていることを周囲に知られたくないという心理が働くからだ。しかし、律子はいつも嫌な顔一つせず、屈託の無い笑顔で迎えてくれる。かえって栄太郎がコソコソと家上がるくらいだ。

律子は「汚い家」と言っているが、子どもがいる割には部屋の中は掃除が行き届いている。それは律子のまめな性格によるものなのだろう。

「今、お茶を淹れますね」

「ああ、どうぞお気遣いなく」

それでも律子はお茶を淹れてきた。

「健一君はどうですか」

「ようやく保育所にも慣れました。でも、まだ『ちゃ、ちゅ、ちよ』がうまく発音できないんですよ。ひらがなもまだ覚えていないし、数字も頭に入っていないんです。このまま小学校に行けるんでしょうか」

栄太郎はお茶には手を出さず、律子の目をジッと見つめ返した。

「大丈夫ですよ。就学指導委員会でもそのくらいのお子さんはたくさんいらっしゃるって言っていましたからね。それよりお母さんが生き活きとしているほうが子どものためになりますよ」

「まあ……」

律子は正座を崩さず、困ったような顔をしている。勘のいい女性ならば、ここで栄太郎が何を言わんとしているかわかったであろう。しかし、律子はそのまま口を噤んでしまった。

「私が何のために健一君を保育所に通所できるようにしたかわかりますか」

「……」

「佐々木さんに働いてもらうためなんですよ」

そう切り出した栄太郎は膝に置いた拳を固く握り締めていた。額には薄っすらと汗が滲んでいる。

「私、北島さんには本当に感謝しているんです。健一のために親身に相談に乗っていただける方は北島さんしかいないと思って……」

「私だって健一君のことが心配ですよ」

「もうちょっと、もうちょっとだけ待つてください。気持ちを整理しますので」

「何を整理するんですか。どのくらい待てばいいんですか」

栄太郎は視線を落しながら、頭をかいた。その口調はどこか恨み節だ。栄太郎にしてみれば、早く苦しい時間を切り抜けたかったこともある。だが、それ以上に律子が自分で働きながら生計を支える自立した母親としての姿を健一に見せてもらいたかったのだ。

「もう少し子どものことを考えさせてください……」

律子が力なくつぶやいた。栄太郎は「はあ」とため息をつく、「わかりました。それでは来週の月曜日にまた来ます」と言って立ち上がった。

「あの、気を悪くなさらないでくださいね」

律子が不安げな顔を栄太郎に向けた。

「ふんぎりがつかない自分が情けないんです」

「あまり思いつめるより外に出たほうがいいこともありますよ」

そう言っただけで栄太郎は律子の家を辞した。

「そうか、今日も佐々木はダメだったか……」

栄太郎からの報告を受けた高橋係長はパソコンの画面から目を逸らすことなく返した。

「はあ。何が不安なんでしょうかね」

「そりゃあ、発達が遅れている子を持つ親の持つ悩みよ」

高橋係長が栄太郎に向き直る。深く椅子にもたれながら、背伸びをした。いい加減、パソコンとのにらめっこにも疲れたとでも言いただげだ。

「いいか北島、そりゃあ生保は自立させてナンボだが、目の前の餌に食らいつかせるばかりが能じゃないぞ」

「どつという意味ですか」

「その家庭の問題を包括的に解決していかねば、結局はまた生保に落ちてくるんだ。そのためには、お前が佐々木とどれだけ向き合っ
て付き合えるかにかかっているんだ。来週の月曜日、もう一度ちゃんと話し合ってこい」

栄太郎は今日の律子とのやり取りを思い出す。それはやや一方的であつたかもしれないと反省していた。

「はい」

「俺は煙草を吸うぞ。お前もちょっと付き合えや」

高橋係長がニヤツと笑った。栄太郎もニヤツと笑い返す。栄太郎は煙草を吸わない。それでも高橋係長が煙草に誘つたのには理由がある。健康増進法が適用されてからというもの、庁舎内では煙草が吸えなくなつた。灰皿は市役所の表玄関と裏口にある。職員が利用するのはもっぱら裏口だ。高橋係長はヘビースモーカーだつた。一時間おきに煙草で席を立つくらいだ。もつとも、本人に言わせれば気分転換をして、効率よく仕事をしているのだとか。高橋係長が地区担当員を煙草に誘うことは、そう珍しいことではない。事務所の中ではどうしても肩書きに縛られ、教科書どおりの答えしか返せない時がある。しかし、こうして煙草を吸いながらの雑談ならば違ふ。本筋からは外れるが、仕事の裏技などを教えられるのである。それだけ、高橋係長は生活保護の業務に従事して長いということになる。程なくして、市役所の裏口の寂れた扉の前に高橋係長と栄太郎の姿を見ることが出来る。栄太郎は缶コーヒーを片手に、高橋係長の言葉に耳を傾けている。

「そもそもだな、佐々木にとっての自立とは何なのか。そこを考えないといけない。厚生労働省は少しでも働かせようと躍起になっているが、僅かなパートで無理して働かせても目先のことだけだ。彼女の世帯の自立とは何なのか、何が必要なのか、もう一度検討してみよう」

「佐々木の自立ですか」

「経済的な自立もそうだが、彼女自身が生き生きと生活していけるような自立が好ましいんじゃないかな」

高橋係長は煙草の灰を灰皿にポンと落としした。そして、おもむろに煙草を吸う。紫の煙が筋となって立ち昇り、口からは灰色の息が吐き出される。

「今の佐々木は子どものことで頭が一杯なんじゃないですかね」

「そこよ。子どもの不安を減らす材料をお前は作ってやっているじゃないか。後は本人の問題だ。そこをどうするかなんだ。大きい声では言えんが、あまりギューギューやるなよ。せつかくここまで築いてきた関係が壊れるぞ」

「うーん……、どうやったらいいいんですかねえ。そろそろ俺、煮詰まってきましたよ」

「そうか、今日は金曜日だし、残業もそこそこにして飲みに行くか」
「あ、行きます、行きます」

高橋係長が満足げな顔をして煙草を灰皿でもみ消した。堂々と歩く高橋係長の後に栄太郎が続く。

金曜日の夜ということもあり、居酒屋はどこも混み合っていた。栄太郎たちが腰をすえたのは三軒目の居酒屋だった。チェーン店ではない、地元の居酒屋だ。それでも高橋係長と栄太郎の二人が座るのがやっとだ。すぐさま、女性店員がおしぼりとつきだしを持って飲み物の注文を伺いにきた。栄太郎はその店員の顔を見て愕然とした。

「さ、佐々木さん……！」

高橋係長の目も丸くなった。それは紛れもなく律子だった。艶やかな美しさはそのままに律子は口に手を当て、ただただ驚愕している。

「どうしてこんなところにいるんですかっ！」

栄太郎の口調は荒かった。胸の内で赤い憤怒の激情が噴出しそうだった。だが、すぐに高橋係長が栄太郎を制した。

「気持ちわかるが、相手は客商売なんだぞ。いいじゃないか、月曜日に話を聞けば。とりあえず生二つね」

律子は注文を復唱することなく、カウンターの向こうへと消えた。栄太郎はややもすると殺気のこもった目でその行方を追った。

(何だよ、俺は道化師かよ)

そんな思いが栄太郎の頭の中で逡巡していた。栄太郎のはらわたは煮えくり返っていた。心の中で振り上げた拳を、振り下ろせないでいる気分だ。そんな栄太郎の心を見透かしたように高橋係長がクスツと笑った。

「まあ、落ち着け」

「はあ……」

栄太郎は気のない返事しか返せないでいる。

ビールを運んできたのは男性の店員だった。とりあえず、高橋係長と栄太郎はジョッキを鳴らす。高橋係長はグーツと半分近くのビールを胃の中へと流し込んだが、栄太郎はチビチビと舐めている。

「どうした、進まないようだな」

「こんなまずい酒、初めてですよ」

「ふふふ、そうかな。祝い酒になるかもしれないぞ。もしかしたら月曜日に保護の辞退届が提出されるかもしれない」

「それじゃ、自立にならないじゃないですか」

「よし、まだ見所はあるな。月曜日はきっちり話をつけてこい」

高橋係長はグーツとビールを飲み干した。

「お前も早く飲んじまえ。河岸を変えるぞ」

「はい」

栄太郎は苦味の強いビールをグーと胃の中へと流し込んだ。強い炭酸が栄太郎にゲップを吐き出させた。

「ふっ……」

栄太郎が振り返る。すると、律子は柱の陰から怯えるようにして、栄太郎を見ていた。栄太郎はひよっとすると冷ややかな視線を律子に送ったかもしれないと、自分で思った。だが栄太郎は気付いているだろうか。「可愛さ余って憎さ百倍」ということを。

「ごちそうさん。お愛想」

高橋係長が男性店員に愛想よく声を掛けた。律子は柱の陰から出てはこなかった。苦悶に満ちたその顔はとても客商売の顔ではなかった。

翌日、栄太郎は昼近くに起きだした。土曜日ということもあり、存分に寝坊をしたのである。いつも土曜の寝起きは悪い。それは、一週間の疲れが取れきれないからだ。栄太郎自身も思っていた。それほど生活保護の現場は激務なのだ。起きだした栄太郎はのっそりとキッチンに向かう。アパートでもめ暮らしをする栄太郎のキッチンはお世辞にも綺麗とは言い難い。いや、キッチンだけではない。六畳間の部屋も雑然と散らかっているではないか。

（佐々木の家の方が綺麗だな……）

栄太郎は思わず苦笑した。律子の困惑した顔が脳裏を過ぎった。

（俺をだましましたこともあるが、子どもはどうしているんだ？）

ふと、そんな疑問が湧いてくる。健一を保育所に預けられるのは日中だけのはずだった。居酒屋の営業時間に健一を預かってくれるところがあるのだろうか。

（友人か、それとも母親か）

律子と母親の伸江とは出産を機に絶縁状態が続いていると聞いていた。その可能性は低いだろうと栄太郎は推測する。

（友人に健一を預けているのだろうか）

だが、律子は近所付き合いはもちろんのこと、友人らしい友人もい

ないと以前、栄太郎に漏らしていたことがある。だとすると一体、健一をどうしているのだろうか。そんな、釈然としない疑問を胸に抱きながら、栄太郎はフライパンに卵を落とした。

「あー、いかん、いかん。オフは仕事のことを考えないって決めていたのに！」

卵を焼くジューツという音より大きい独り言が栄太郎の口から漏れた。

トーストと目玉焼きと野菜ジュースの簡単な朝食兼昼食を済ませた栄太郎は、散らかった部屋の片隅に立ってかけてあるエレキギターに手を伸ばした。栄太郎は高校の時からギターを弾いていた。最初はポップスなどを弾いていたが次第にビートルズに傾倒していった。栄太郎が手にしているギターもビートルズが日本公演で使用したエピフォン・カジノというギターだ。アコースティックギターも持っているのだが、今は実家に置いてある。何せここはアパートだ。アンプにつながずにかき鳴らす、エレキギターくらいの音量がちょうどよい。

自分の耳を頼りにチューニングを済ませると、栄太郎はギターソロのフレーズを弾き始めた。ビートルズの「ゲット バック」のギターソロだ。映画「レット イット ビー」でもジョン・レノンがエピフォン・カジノを抱え、颯爽とギターソロを弾いている。ビートルズファンならば、お馴染みのシーンだ。

栄太郎は何故、「ゲット バック」を弾いたのか自分でもわからなかった。ただ、困惑する律子の顔が胸に棘のように引っ掛かり、抜けないでいる。そしてフラッシュバックのように、今まで律子が見せた笑顔や、戸惑いなどの表情が浮かんでくるのだ。

（あの時、追い詰めちゃったのかな……）

そんな、少し後悔に近い念がフツと心の中に湧いた。だが、あの時は仕方なかったと思ひ返す。一方で、律子の困惑の表情は栄太郎の胸の中で増大していった。いつの間にか、心を縛り上げ、動けな

くしていく。

「ゲット バック！」

近所迷惑も顧みず、栄太郎が叫んだ。ふと、栄太郎はその意味を考えてみる。「ゲット バック」とは「原点へ還れ」という意味もある。

高橋係長はよく言っていた。「ケースは嘘つきも多いが、何故、嘘をつかなきゃいけないのかを考える。信頼関係の第一歩は相手をまず信じることだ」と。

栄太郎はギターを弾く手を止めた。そして、目を天井に向ける。その瞳にはいくらか力がこもっていた。

「どうだ、土日はゆっくり休めたか」

月曜日の朝、高橋係長がコーヒを啜りながら、栄太郎に話しかけてきた。

「いつもは日曜の午後になると憂鬱になるんですけどね。今回は大丈夫でしたよ」

「ほっ……」

感心したように高橋係長はカップを置いた。その目は心から笑っている目だ。どうやら、栄太郎が「仕事の面白さがわかってきた」と思っているらしい。

「俺なんか、今でも日曜の夕方は辛いね」

「係長が……、ですか」

「おいおい、俺は仕事の鬼みたいに思われているようだけど、結構ナイーブなんだぞ」

栄太郎が思わず苦笑する。

「そこは笑うところじゃない。まあ、サザエさんの時間になると憂鬱になる『サザエさん症候群』ってやつだ」

「いつもの自分もそれですよ。でも、今回は早く佐々木に会いたくて」

「そうか、そうか。じゃあ早く行ってやれ」

「はい」

栄太郎が頷くと始業のチャイムが鳴った。それを待っていたかのように、数人の中年の男女が窓口駆け寄った。いつもの朝の光景だ。

「あー、順番、順番。押さないで！」

小島という面接担当がいかにも煩わしそうに怒鳴った。栄太郎はそれを横目でチラツと見ながらケースファイルを広げた。もちろん、佐々木律子のケースファイルだ。ケースファイルには律子の個人情報事細かく記されている。生活歴から病歴、資産の状況に親族関係などである。栄太郎は保護台帳と呼ばれる紙面に目を通すと、納得したように頷いた。そして、大事そうにビジネスバッグをさす。栄太郎の口元が少し緩んだ。

窓口では小島が腕組みをして、何やら話を聞いている。

「そんなこと言ってもねえ……」

小島のその言葉が栄太郎の耳についた。だが、栄太郎は何食わぬ顔をして、小島の横を擦り抜けると、公用車の鍵を掴んだ。フツと小島の方を顧みる。小島と男はまだ対峙していた。それは、どちらかが妥協しない限り、永久に平行線を辿る態度に見えた。

(だからと言って卑屈になる必要はないな)

ふと、栄太郎はそんなことを思いながら、階段を下っていった。

第二話

栄太郎は公用車をいつもの空き地に停めた。車を降りると「ふう」とため息をついて、栄太郎はクリーム色のアパートへと向かった。

呼び鈴のしわがれた声はいつもと同じで、まるで老婆のようだ。扉の向こうから「はい」という静かな声がした。それは、律子の声に間違いないが、感情を押し殺したような声色はこれからの来訪者を身構えているのだろうか。

扉が少しだけ開いた。その隙間からくつきりとした二重瞼が覗いていた。ここで栄太郎は、その瞳に吸い込まれそうになる。笑ってはいない。緊張の色を隠せない瞳だった。口は引き攣ったように、固く結ばれていた。

「ああ、北島です。ちょっと、お話、よろしいでしょうか」

「はい……、どうぞ……」

律子には居留守を使う手段だつてあつた。栄太郎が訪問する時間帯に出掛けたつていい。それでも、きちんと訪問を受け入れるところに潔さがあつた。ただ、律子の顔は強張り、容易に触れれば、壊れてしまうような脆さを湛えていた。

律子は無言のまま、栄太郎を奥の六畳間へと通した。そこで栄太郎に座布団を勧め、お茶を淹れようと立った。

「佐々木さん……」

栄太郎のその声に、律子の足がピタツと止まる。

「佐々木さん、居酒屋で働いている間、健一君はどうしているんですか」

律子はその場に座り込んだ。律儀なほど固い正座である。栄太郎は律子の方へ向き直った。そして、律子を直視する。律子は俯いていた。垂れ下がった前髪を掻き分けることもなく俯いていた。

「私はね、あなたが居酒屋で働いていたことを責めているんじゃない。健一君のことや、あなたの将来のことが心配なんですよ」

栄太郎のその言葉に、律子が恐る恐る顔を上げた。栄太郎の心の底を窺うような瞳をしている。律子は細かく動かしていた指の動きを止め、拳をギュツと握った。そして、固く結んでいた口がにわか

に開いた。「本当は居酒屋なんかで働きたくなかったんです……」

「ほう……」

「母が健一を看てやるから、働けと……」

そう言った律子はまた俯いてしまった。だが、栄太郎は穏やかな口調で続けた。

「お母さんとは絶縁状態じゃなかったんですか」

「それが先日、ひよっこり顔を出しまして……。健一の面倒を看てやるから働けと……」

「ほう、それはどういいう心境の変化なんでしょうかねえ」

栄太郎は責めるふうでもなく、ゆっくりと腕組みをした。律子は何やらブツブツと呟いている。それは、はっきりとは栄太郎には聞こえない。

「どうしたんですか」

「母は私のお金が目的なんです。居酒屋で夜働けば福祉事務所にバシないだろうからって。子どもの面倒を看るから給料の三分の一をよこせて。母はパチンコやお酒のお金が欲しいんです」

「それはひどい！」

さすがに栄太郎も驚愕の色を隠せなかった。律子の肩は震えていた。その目からは大粒の滴が垂れている。それをハンカチで拭うこともなく、流れるままにさせていた。栄太郎はズボンのポケットからハンカチを差し出すと、律子に手渡した。律子は少し躊躇ったものの、ゆっくりとした動作でハンカチを受け取った。そして、涙を拭う。

「私もこんな優しい北島さんを騙すのは心苦しかったです。でも、母に強く言われると逆らえなくて……」

「いいんですよ。ちゃんと話してくれたじゃないですか。それより

今後のことですが、やっぱり居酒屋は健一君のためにもよくないと思いますよ」

律子はハンカチで目を覆いながら「ええ、ええ」と頷いている。

「それに、お母さんにお金が渡るのもよくない。これも不正受給の一種ですからね」

「先日、母が健一にお酒を飲ませたんです。もう、私も母には健一を預けたくないんです。母とは縁を切るつもりで、ここで暮らし始めたのに……」

「そうですね。お母さんも生保の受給者ですからね。きちっと指導します。今がいい機会かもしれませんね」

律子は「ありがとうございます」と言い、深々と頭を下げた。

「ところで、もう居酒屋の収入はありましたか」

「はい。まだ見習いで日数も少ないので、先月分は三万五千円ですが……」

「給与明細はありますか」

「ちょっと、お待ち下さい」

律子が立ち上がった。長い間、律儀にも正座をしていて足が痺れているのだろう。歩き方が少しおかしい。律子は筆筒から一枚の紙切れを持ち出すと、栄太郎に手渡した。それは汚い字で書かれた、いかにも胡散臭い給与明細であった。

「じゃあ、収入申告書を書いてもらいましょうか。これは来月の保護費で調整させてもらっていいですか」

「はい。でも、母に摸られてしまっている……」

「今回は不正受給扱いをしませんから、普通の勤労控除と新規就労控除というものが適用されます。収入と見なされる金額はいくらもありませんからご心配なく」

律子がまたハンカチで瞳を拭いた。

「北島さんってどうしてこんなにお優しいのかしら。私が子どもの時、よく来ていた人は厳しい人ばかりだったのに……」

「当たり前のことを、当たり前前にやっているだけです。それと……」

…」
そう言いかけて、栄太郎はビジネスバッグの中を弄った。そして、取り出したのは小さな包みだった。一見して玩具屋の包みだとわかる。

「今日は健一君のお誕生日でしたね。私からのプレゼントです」
栄太郎がはにかむように笑いながら、プレゼントを差し出す。

「えー、やだ、どうしよう。私だって用意していないのに……」
律子は口に手を当てたかと思うと、急に前のめりになった。まるで、ひれ伏すように。そして、律子の身体が小刻みに震えた。

「うつつ、ありがとうございます……」

嗚咽交じりのお礼の言葉は栄太郎の胸に深く響いた。律子の顔は化粧を施さなくても美しい。栄太郎はそう思っている。今、その顔がクシャクシャになっているに違いない。それでも、ソフトビニールの人形一つでここまで感動してもらえとは思わなかった。律子にしてみれば、物はどうであれ、息子の誕生日を覚えていてくれ、プレゼントをくれたことが嬉しいのだ。栄太郎自身もただ仕事ならば、そこまでする必要はなかったと思う。しかし、プレゼントを買わずにはいられなかったのだ。気が付けば日曜日の昼間、玩具屋の前をウロウロする自分がいた。滑稽だと苦笑しながら『仮面ライダー』の人形を手にしたのである。もつと高価な物をとも思ったが、それでは律子が恐縮してしまうだろう。

「私、今日限りで居酒屋を辞めます。そして、昼間の仕事を見つめます。今度はいつ来てくれますか」

顔を上げた律子の瞳には力がこもっていた。栄太郎がフツと笑った。

帰帆市役所に戻った栄太郎は、役所裏口の灰皿の前で缶コーヒを啜っていた。高橋係長の煙草に付き合っているのだ。

「そうか、収入認定で処理するのが妥当だろうな」

高橋係長が煙草をふかしながら、納得したように呟いた。

「はい、本人も反省していますし、ナナハチ（不正受給）では処理したくないんですよ」

「監査対策はしっかりやつとけよ。記録もうまく工夫するんだぞ。厚生労働省や会計検査院はすぐナナハチをかけると言ってくるからな」

「はい、そりやもう……」

「お前、随分と佐々木には優しいな。まあ、この仕事、一人くらい入れ込むケースがあった方がいい」

「はあ……」

栄太郎は照れたように頭を掻いた。その様を高橋係長は目を細めて眺めている。

「そこで係長にご相談なんです……」

「ん、何だ」

「木曜日に職安に付き添う予定なんですよ。そこできっちり次の職の内定をもらうつもりなので、基礎控除と新規就労控除はかけてもよろしいでしょうか」

「うーん……」

高橋係長が唸った。煙草を肺の奥まで吸い込み、白い煙を吐き出す。目は遙か彼方を眺めていた。

「必ずそこで決めるよ」

「はい、ありがとうございます」

生活保護で勤労収入があった場合には控除がある。基礎控除とは勤労に伴う必要経費として認定されるもので、新規就労控除とは新規に継続性のある就労を開始した者に認定される控除である。

「それと、佐々木伸江の指導なんです、確か担当は戸沢さんでしたよね。私も一緒に指導に付き添いたいんですが……」

「わかった。きつちり、収入申告書をとってこい。娘と孫を食い物にするなんて最低だな」

高橋係長がニンマリと笑う。栄太郎もニンマリと笑った。どうもこの二人は気が合うようだ。

「ところで北島は佐々木に入れ込むようになってから、活き活きしてきたな。前のくたびれた感じがあまりしなくなっただぞ」

「そうですか」

「ふふふ、それがこの仕事の面白さよ」

佐々木伸江は律子の家から少しばかり離れた、平屋の借家に住んでいる。この借家で律子も育ったのだ。栄太郎が戸沢と訪問した時その家は妙に寂れて見えた。外にはガラクタが無造作に積まれ、衛生感のない家だった。曇りガラスの向こうにも乱雑に積まれた家具やゴミらしきものが見える。律子が古びたアパートでも比較的清潔にしているのに対し、母親は不衛生で無頓着な人柄らしい。

戸沢の話では、昼間に訪問した時でも酒の匂いを漂わせていたことがあったという。よくパチンコ屋で見かけたなどの通報も民生委員からある。どうやら生活も荒廃しているようだ。

「ごめんください」

戸沢が風で軋む扉を叩いた。すると、中から「あいよー」とだみ声が返ってくる。伸江の声だ。戸沢は無遠慮に扉を開けた。奥の間から中年のでっぷりと肥えた女性が、身体をタップタブと揺らして玄関までやってきた。

「何だい、この前、来たばかりじゃないか」

「今日は特別な用事があったてきました。こちらは娘さんの担当をしている北島です」

戸沢に紹介されて栄太郎が頭を下げた。だが、視線は逸らさない。しっかりと伸江を見据えていた。

「やだねー、特別な用事なんて。心臓に悪いじゃないか」

「まあ、玄関じゃあなんなん得上がらせてもらいますよ」

伸江の返事も聞かぬうちに、戸沢は靴を脱いで家上がった。栄太郎も後に続く。

家の中は予想通り、相当に汚かった。廊下はもちろん、部屋の中にもゴミが散らかっている。食べかけの弁当や洗っていない食器。

それらを見るだけで栄太郎は胸がムカムカした。伸江はカップ麺の器を灰皿代わりにしていた。残ったスープと煙草の臭いが混ざり合い、悪臭を放っている。話すべきことを話して、一刻も早く、この場を立ち去りたかったのは栄太郎も戸沢も同じである。

「ところで伸江さんは娘さんの律子さんからお金を貰いましたね」

戸沢が睨むような視線で切り出した。

「ああ、ちよいとした小遣いだよ」

「娘さんが働いて、その間、お孫さんの面倒を見るからと言って給料をピンハネしているそうじゃないですか」

「律子が言ったのかい！」

伸江が声を荒げた。栄太郎が少し動じる。律子の立場を心配したのだ。

「律子さんにとっても迷惑な話なんですよ。どちらとも生活保護の受給者ですからね」

戸沢は腕組みをし、一層強い口調で伸江を責めた。

「そうかい、そうかい。せっかく仲良くしてやろうと思ったのにね」

「仲良くするなら、お金抜きでされたらどうですか」

そこに栄太郎が口を挟んだ。

「伸江さんだって、せっかく可愛いお孫さんと仲良くなれるチャンスじゃないですか。それだったら、お金なんか抜きで、律子さんの自立についても考えてあげてくださいよ」

栄太郎が懇願するように続けた。すると、伸江は「はあーっ」と深いため息をついて、俯いてしまった。

「どうせ、貰った金はパチンコに使うか、飲んじまったんだろう」

戸沢がきつく問い詰めた。伸江はただ頷いている。

「もう変えられないよ、私の暮らしは……」

伸江は俯いたまま、ポツンと呟いた。背中にも肩にも、いや全身から寂寥のオーラが漂っている。

「まだ変われますよ。変わるうと思った時が、その時ですよ」

栄太郎が少し伸江の方へ寄った。伸江が顔を上げた。その顔はや

つれていた。歳はまだそんなにいつていないはずだが、随分と老けて見える。それは生活に張りがないからだと栄太郎は思う。自分もそんな顔を鏡で見たことがあった。今は律子に関わることにより、仕事に張りが出てきたのだ。

「お孫さんと公園で遊んだっていいじゃないですか。孫に頼られるっていうのはいいものかもしれませんよ」

「この前、預かった時は正直、嬉しかったんだよ。孫なんて煩いだけかと思っただけどねえ……」

「だったら、これを機会にちゃんと向き合ってみたらどうですか」

「そのためにはパチンコも酒もほどほどにするんだな」

戸沢は腕組みを解き、ビジネスバッグから一枚の紙を出す。

「ほら、娘さんから貰った金額を記入するんだ。もし改心するならお情けで不正受給扱いにはしないから」

「わかりました。ところでお願いなのですが、そちらの方に律子との仲を取り持っていただけませんかでしょうか」

戸沢が栄太郎を見た。栄太郎は口元を緩めると目で頷き返した。

「くれぐれもお孫さんにお酒なんか飲まさないでくださいよ」

栄太郎が苦笑した。

その日は水曜日ということもあり、職員は残業をせず、一斉に退庁した。水曜日は一斉消灯のノー残業デーなのである。栄太郎ももちろん、手際よく帰り支度を済ませ、帰途についた。

栄太郎は電車で通勤しているが、市役所がある帰帆駅の隣の百日台駅と程近い。そこは駅を挟んで律子とも生活圏が重なる。なるべく駅の反対側には行かないようにしている栄太郎ではあるが、この日は何故か駅の反対側にある大きなスーパーマーケットの方に足を運んだ。

（もしかしたら律子に会えるかもしれない……）

そんな気がしていたのだ。栄太郎の頭の中では律子の笑顔が反芻していた。自分でも滑稽だと思うが、それが地区担当員としての使

命なのか、それ以上の感情なのかはつきりとはわからなかった。もし、律子に恋愛感情が芽生えたとしたら、それを否定したい自分もどこかにあった。支援する者と、される者。そこに恋愛感情を挟むのはプロのすることではなかった。以前、栄太郎が生活保護の全国地区担当員研究協議会に参加した時、ある地区担当員から「母子家庭とデキちやう担当が多い」と聞かされたことがある。そのときは思わず嫌悪したものだ。

栄太郎はモヤモヤした頭を片手で抑えながら歩いた。すると、人込みの向こうに律子と健一らしき人影が見えた気がした。栄太郎は咄嗟に走った。だが、その人影はすぐに雑踏の中に紛れてしまった。（ああ、馬鹿馬鹿しい……。何をやっているんだろうか、俺は……。）栄太郎はため息をつくともと来た道を引き返し始めた。

木曜日の朝、栄太郎は市役所へは行かず、帰帆公共職業安定所へ直行していた。無論、律子と約束しているのである。職安の前で栄太郎はソワソワしながら律子を待った。近くのバス停まで何度も往復する。その様はまるで動物園の熊だ。

「おはようございます」

その聞き覚えのある声に栄太郎が振り向くと、律子がそこにいた。「ああ、おはようございます」

栄太郎が呆気にとられたような顔をした。律子がバスから降りた気配はない。不意を突かれたのである。

「早めに出てきたので駅から歩いちゃいました」

「ああ、なるほど」

律子はベージュのブラウスにジーパンというオーソドックスなスタイルで、薄化粧が見る者に好印象を与えていた。

「先日は息子のためにありがとうございました。息子もすっかり気に入りまして、ずっと手放さないんですよ」

律子が白い歯を覗かせながら言った。ルックスと相俟って、何とも爽やかな言葉だった。

「いえ、喜んでもらってよかったですよ。健一君は仮面ライダーが好きだって言っていたから。実は僕も仮面ライダーが好きなんですよ」

「もしかして、オタクですか」

「そう見えますか」

「あははは……。まさか、ねえ」

「冗談はこのくらいにして行きますか」

「はい、よろしく願います」

こうして栄太郎と律子は職安の自動扉をくぐった。

帰帆公共職業安定所で生活保護の受給者が相談する場合、専門援助部門という部署で相談することになっている。いわゆる障害者などと同じ扱いとなっているのだ。福祉事務所の地区担当員は少なからず、この専門援助部門とは顔がつながっており、相談しやすい体制ができていた。

「おはようございます。福祉の北島ですが……」

するとカウンター越しに、眼鏡をかけた中年の女性が栄太郎の方へ向き直った。この女性は加藤といい、専門援助部門に配置されている専門担当官だ。

「おはようございます。今日も仕事探しですか」

「ええ、まあ」

「この前の人はモチベーションが低かったけど、この方は大丈夫でしようね」

加藤が上目遣いで、眼鏡の奥から栄太郎を睨むように見た。栄太郎は「すみません。今回は大丈夫ですよ」と少し恐縮している。そして、律子に椅子に座るように促す。律子は一礼して椅子に座った。「こちらがご相談したい佐々木律子さんです」

「そう。で、佐々木さんはどんなお仕事をお探しですか」

「子どもが保育所に入っているので、九時から五時までの仕事ならば正社員、パートは問いません。職種も問いません」

加藤の眼鏡が光った。

「職種は問わないって言ったって、男がやるような仕事だつてあるのよ。土木作業のような」

律子の顔が一瞬、怯むがそれでも加藤を見つめ返した。

「構いません」

「こつちも検索するのに困るのよ。ある程度、絞り込んでもらわなきゃ」

「では、清掃の仕事なんかありますか」

加藤が「清掃ね」と言いながら、コンピューターのキーボードを叩き始めた。栄太郎は満足そうに二人のやり取りを眺めていた。

「あるわよ、あるわよ。これなんかどう、清和ビルメンテナンス」

加藤が一枚の求人案内票を差し出す。

「他にもあるわ。大和ビルディング。どれもここから近場よ」

律子は二枚の求人案内票を見比べる。栄太郎が見ても条件は甲乙つけ難い。

「清和ビルメンテナンスでお願いしてもいいですか」

「では、早速電話しますから」

加藤が受話器を取った。栄太郎も律子も加藤に注目している。

「おはようございます。清和ビルメンテナンスさんですか。こちら帰帆公共職業安定所の加藤と申しますが、清掃の求人はまだ行っていますか。ああ、そうですね。実は二十一歳の女性で希望している方がおりました。ええ、はい。名前を佐々木律子といいます。はい、明日ですか。ちょっとお待ち下さい」

加藤が受話器を一旦離すと、律子の顔を覗き込んだ。

「佐々木さん、明日、面接大丈夫ですか」

「あ、はい」

「大丈夫です。はい、では会社の方に。ええ、はい、履歴書を持参してですね、はい。ありがとうございます。では、よろしくお願い致します」

加藤が受話器を置いた。どうやら面接まで漕ぎ着けたようだ。

「先方はあなたに大分、期待しているみたいですよ。何しろ若いで

すからぬ。面接は明日の十時、会社で行われます」

加藤はそう言いながら、はがき大の用紙に何やら記入していく。これが職安から手渡される求人票である。

「はい、これを持って面接に行ってください」

「ありがとうございます」

栄太郎と律子は声を揃えて言った。律子の顔はまるで憑き物が落ちたように晴れやかだった。栄太郎はそんな律子の顔を見ることが何より満足だった。

帰りは帰帆の駅に向かって、栄太郎と律子で歩いて帰った。律子が歩いて帰ると言うので、栄太郎も歩くことにしたのである。栄太郎は少し照れるような胸の締め付けを覚えながら、律子と一緒に歩いた。

「今日は本当にありがとうございます。職安って敷居が高いところだと思っていたもんですから……」

「普通の人にはそうですね。僕はあの加藤さんとツーカーなんですよ」

「まあ……。でも、本当によかった。後は面接を頑張らなきゃ」

律子が一步前へ出ておどけてみせた。その姿が自然であり、嫌味がなかった。そんな律子の姿に栄太郎もフツと笑う。だが、すぐに真顔になった。

「佐々木さん、昨日、お母さんと話をしてきましたよ」

「そう……」

すると、律子の瞳が急に寂しさを湛えたそれになった。

「お母さん、お金抜きで健一君との時間が欲しいそうです」

「果たして本心かしら」

「担当が相当きつく絞りましたからね。でも、言っていましたよ。『孫と居られると楽しい』って。そのためにお酒もパチンコも控えるそうです」

「えー、母があ……。信じられない」

「随分としょぼくれて、目が潤んでいました」

「あの母がねえ……」

律子はまだ困惑したような顔をしている。今までの生活歴の過程の中で険悪な関係になった親子関係。給与まで搾取され募った不信はそう簡単に拭いきれるものではない。だが、栄太郎は親子関係修復のキーパーソンの役割を担っていたし、それを自覚していた。

「きつと、改心したお祖母ちゃんは健一君にもプラスになるし、あなたも働く上でも重宝しますよ」

律子は答えず、ぼんやりと空を見上げた。綿飴のような雲がゆつくりと千切れながら飛んでいく。律子はその雲を眺めながら、小さなため息をついた。

「しょうがないわね。そうは言っても自分の親だもんね……。本当、北島さんにはお世話になりっぱなしね。いつか何かお礼しなきゃ」

律子が悪戯っぽく笑った。その笑顔に栄太郎は一瞬、ドキッと心臓が高鳴った。

「お礼なんていいですよ。こっちは仕事ですから」

栄太郎は慌てて手を振った。心なしか顔が赤いような気がする。

「そう、仕事ねえ……」

律子がぼんやりと呟いた。

金曜日の正午前、栄太郎のデスクの電話が鳴った。栄太郎はそれが律子からの外線だと直感した。

「北島さんに外線です」

上品な電話交換の音がする。栄太郎は吉報であることを祈った。

「北島さん、佐々木です。やりました。面接で即決でした」

「よかったじゃないですか。いやあ、おめでとうございます」

「ちょうど、若手の人材が欲しかったところだったんですって。ラッキーでした」

「佐々木さんの情熱もあるんじゃないですか」

「そりゃ、こっちだって必死でしたよ。何せ、北島さんの顔に泥を塗るわけにいきませんからね」

「いや、泥は塗られ慣れていいるから平気ですよ。ところで、毎日仕事ですか」

「ええ、月曜日から金曜日までバッチリ。給与も手取りで二十万円くらいは貰えそうなんです。頑張れば正社員への登用もあるって…」

…

「ほう、それはこの時代、景気のいい話ですね。応援していますよ」
「でも、北島さんとはあまりお会いできなくなりますわね」

電話の向こうの声が少し寂しそうだった。その空気が電話線をしんみりと伝わる。鈍感な男性でもこのくらいはわかるであろう。

「ああ、平日、日中の訪問は難しくなりますね」

「私ね、よく日曜は子どもを連れて百日台公園に行きますの」

栄太郎の頭の中にピンとくるものがあった。百日台公園といえば、栄太郎のアパートからも程近い。そこはサッカー場や野球場、動物園まである市の総合公園なのだ。

「百日台公園ですか。あそこは遊ぶのにはいいですね」

「ご存知ですか」

「実はうちからも近いんですよ」

普通は地区担当員がケースに家の在処を知られるような言動は慎むべきである。しかしこの時、栄太郎は自然とそう言ってしまった。「そうなんですか。健一があそこのアスレチックが気に入っていませんね」

「そうかあ。ああ、私もたまには外でギターを弾こうかな」

「北島さん、ギターを弾くんですか」

「ええ、まあ」

「是非、聴かせてくださいよ。私たち、お昼ごろ公園のアスレチックのところに住ますから」

「わかりました。晴れれば、ね」

「健一とてるてる坊主を作っておきます。うわあ、楽しみ」

律子のウキウキした声が受話器から聞こえてくる。栄太郎はそれが外に漏れないかと、内心冷や冷やしていたのだ。

「それでは失礼します」

栄太郎は冷静を装って受話器を置いた。椅子に座ると「ふう」とため息をつき、額の汗を拭いた。

最終話

日曜日の朝、栄太郎はギターを抱えて百日台公園へと向かった。徒歩でもそれほど距離ではない。百日台の駅を少し帰帆駅の方へ歩いたところに、その公園はある。その日は天気ものどかで、頂を撫でる風が心地よかった。

公園に着くと、栄太郎はまっすぐにアスレチックのところへと向かう。だが、まだ律子と健一の姿は見えなかった。栄太郎はベンチに座ると、ギターを取り出し、チューニングを始めた。栄太郎のギター、エピフォン・カジノはエレキギターでもボディが薄く中空構造になっているため、アンプにつながなくてもある程度音が出る。チューニングを済ませた栄太郎はギターをジャラーンと掻き鳴らした。それは青空に気持ちよいほど吸い込まれていく。

栄太郎はビートルズの「ノーホエアマン」を弾き語りで歌い始めた。あれこれと妄想をめぐらす「どこにもいない男」は、現実にここにいる。そんなことを思いながら栄太郎は歌を歌う。

「歌もギターもお上手ですね」

栄太郎の背後から、不意に声を掛けてきたのは律子であった。健一がぴつたりと律子にくっついていて、その手には仮面ライダーの人形がしっかりと握られていた。

「ああ、こんにちは」

「やっぱり、来てくださったんですね」

「青空の下でギターを弾くのもいいもんですよ」

「おじちゃん、仮面ライダーの人形、ありがとう」

健一が律子に促され、屈託のない笑顔を浮かべて礼を言う。どうやら、まだ「ちゃ、ちゅ、ちょ」が上手く言えないらしい。栄太郎は健一の頭を撫でてやった。そんな二人の姿を律子は目を細めて眺めている。

「おじちゃんもね、仮面ライダーが好きなんだよ。その仮面ライダ

「は旧1号さ」

「旧1号って」

「健一君にはわからないかなあ」

「ねえ、何のお歌、歌っていたの」

「ビートルズだよ。ノーホエア マンっていう曲さ」

「いい曲ですね」

律子が八重歯を覗かせながら笑った。その笑顔が栄太郎にはズキンとくるのだ。

「ああ、私も大好きな曲でね……」

健一は仮面ライダーの人形を振りかざし、遊んでいた。そして、そのままアスレチックの方へと向かう。その時もソフトビニールの人形を離さない。

「ポップな曲によく合う、ポップな空をしますね」

「え？」

栄太郎が驚いたように空を見上げた。今日も綿飴のような雲がのんびりと流れている。この上なくのどかな空だ。それを律子は「ポップな空」と表現した。そんな表現もあるものかと、栄太郎は驚いたのだ。それは律子にしか表現できない感性だったのかもしれない。同時に栄太郎は、そんな感性の持ち主である律子にある種の敬意を払った。自分には感じられない感じ方をできる律子が羨ましく、そして、尊敬したのである。そこに、律子が生活保護の受給者などということとは関係なかった。

「いいなあ、その感性」

「そうかしら」

「そうですね」

「昨日、母がうちに来たの。母の手料理を食べたのなんか、何年ぶりかしら。ううん、私の記憶の中には母の手料理なんかなかったわ。正直、あまり美味しくはなかったけど、嬉しかった。それに、母がお酒を飲まないなんて……」

律子が少しはにかみながら、しみじみと言った。手に持ったボー

ルを弄んでいる。

「そうか。お母さんも変わったのかな」

「これも北島さんのお陰ね。ああ、仕事が決まったのも北島さんのお陰だし、母との子ともそう。それに健一だって北島さんのことが好きみたい」

その言葉にギョツとして、栄太郎が律子の顔を覗き込む。律子の顔は心なしか赤い。夕日に染まるには、まだ時を待たねばならないはずだ。

「ふう、私って嫌な女だったと思うの。我が強くて、突っ張っていて、それでいて自分の都合のいいように生活保護に甘えてきた。でもね、こんな親切にしてくれる北島さんをこれ以上、裏切れないよ」
律子の顔は泣きそうだった。

「佐々木さん……」

律子のその言葉は、栄太郎が地区担当員をして、初めてケースから聞く言葉だった。人間、先立つものがなければ生きてはいけない。しかし、本当の貧困とは心の闇に潜むものであるということを知った。栄太郎は知った。

「まずはケースを信じろ」

栄太郎は高橋係長の言葉を思い出す。ケースに裏切られる度に、心の潤いを失くしていく自分を、改めて戒めた。

「おじしゃん、ボールで遊ぼう」

健一が栄太郎のもとに駆け寄ってきた。律子は「こら」と健一を制すが、栄太郎は「いいよ」と言って、ギターをケースに仕舞った。

「よし、何をしようか」

「サッカー」

「じゃあ、あっちの広場へ行こう」

「お母さんも早く」

その姿を知らない誰かが見れば、仲の良い家族に見えたかもしれない。

それからというものの、毎週日曜日の日中、栄太郎は律子親子と過ごすのが日課となっていた。律子は今までのお礼だと言って、栄太郎の分まで弁当を持参してきた。栄太郎は恐縮しながらそれを頂いたのである。その姿は実に微笑ましく、仲睦まじいものであった。律子の仕事も順調であった。もともと気骨のある女性なのだろう、律子は弱音ひとつ吐かなかつた。それどころか、活き活きとしていてではないか。栄太郎もそんな律子を見るのが嬉しかった。すべては順風満帆に見えた。だが、一本の電話で事態は思わぬ方向へ進むことになる。

ある月曜日の朝、栄太郎のデスクの電話が鳴った。

「はい、福祉事務所です」

「北島さんかい。このスケベ」

やや低い男の声色は敵意剥き出しに噛み付いてきた。

「はあ」

「母子家庭の母親に手を出すなんて、あんたそれでも公務員かい」

栄太郎は脳天に雷が落ちたようなショックを受けた。

「あんた、誰ですか」

「誰だつていいじゃないか、市民だよ、一般市民。それより恥を知れつてんだ」

「私は何もやましいことはしていませんよ！」

栄太郎が声を荒げる。すると、フロアが一斉に栄太郎に注目した。栄太郎は肩をすくめ、気まずそうにする。

「日曜日に佐々木とデートしているだろう」

「知りませんね。その方が生活保護を受けているかどうかもお話できません。守秘義務がありますので……」

「ああ、そうかい。じゃあ『市長への手紙』でも出そうかね」

栄太郎は内心、焦っていた。『市長への手紙』とはいわゆる市民からの通報で、秘書課へ直接送られる。そんな内容の手紙が送られたら大問題となる。

「仮にその佐々木さんとやらとお会いしていても、仕事上でお会い

しているだけですから」

「弁当を貰うのモカイ」

栄太郎の額から脂汗が滲んできた。栄太郎は記憶の中で、声の主を探していた。自分のケース、民生委員、あらゆる可能性を探るが、今ひとつ確証が持てない。ただ、確かなことは、相手は栄太郎に敵意を持っているということだ。そうした場合、誤解を解くのも容易ではない。

「だから、何にもないんですよ」

もはや、栄太郎の声は哀願に近かった。緊迫した空気が電話線の向こうから伝わってきている。

「ふーん、じゃあ、やつぱり会っていることは認めるんだ。で、誰が信じるというの。それを」

抑揚のない声が押し迫ってくる。栄太郎の持つ、受話器は汗でべったりと濡れていた。

「ですから、仕事の一環です」

「仲良く弁当を突っついてねえ。夜もイチャついているんじゃないの。佐々木は美人だしさ」

「いい加減にしてください！」

「あんたがそういう態度ならこっちも『市長への手紙』を出すよ」
「どうぞ、ご自由に！」

栄太郎がそういういい終えると、電話はガチャンと切れた。栄太郎はそのまま椅子に座ると、しばらく呆けていた。電話のやり取りを聞いていたのだろう。同僚からヒソヒソ話が聞こえる。栄太郎は唇を噛み締めながら、呆けていた。

「北島、ちよつと来い」

その高橋係長の声も栄太郎には届かない。

「おい、北島！」

ようやく栄太郎が振り向いた。その顔はいささか狐に摘まれたような顔をしていたか。こうして、栄太郎は市役所裏口の灰皿の前で、高橋係長に事の顛末を報告することになる。無論、高橋係長には律

子から弁当を貰ったことも包み隠さず述べた。

「うーむ、ことによっては『市長への手紙』が来るかもしれないな。お前も覚悟しておけ」

「もしかして懲戒処分とかですか」

栄太郎は少し背中を丸めて、高橋係長の瞳を覗き込んだ。

「そうならないように対策を練るんだよ」

高橋係長が煙草の煙をパァーッと吐き出す。いつものことながら、白い煙は空気と混ざり合いながら、栄太郎の前をかすめていく。

「いいか、近日中に佐々木を自立させて、生保を廃止にしろ。でないと、俺もお前をカバーしきれん」

「無理ですよ。最低生活費（国の基準）まで三万円ほど足りない見込みなんですよ。給与を貰えるのだから、一ヶ月先ですし……」

「三万円くらいなら、そこを何とかするのがお前の腕の見せ所だ。自立させるために会っていたとなれば申し開きも立つだろうが」

「そりゃ、そうですね」

栄太郎は気が重かった。ここで無理に辞退届を強要すれば、ようやく開きかけた律子の心がまた頑なに閉ざされてしまうような気がしたのだ。

高橋係長はポンと栄太郎の肩を叩くと、先に事務机へと戻っていた。取り残された栄太郎は「はあーっ……」と重いため息をつくのみであった。

律子から電話がかかってきたのは、その日の夕方遅く、栄太郎が残業している時間であった。律子の口調は慌てていて「変な手紙がポストに入っていた」と言う。栄太郎は朝方の電話の主であろうと推測した。

「私のところにも変な電話がかかってきましたよ」

「まあ、ごめんなさい。私のせい……」

律子が言葉に詰まった。

「あなたが謝ることじゃない。それより、これから伺ってもいいですか」

栄太郎にはまだ、律子を自立に導くだけの方策があつたわけではない。それでも、栄太郎はビジネスバッグを抱え、上着を掴んでいた。

栄太郎はそのまま帰宅するつもりで律子のアパートへ向かった。

いつもは公用車で訪問するが、今日は電車で行く。百日台の駅を下りて、商店街の中を抜けると、すぐに閑静な住宅街に入る。もう、日はとつぷりと暮れていた。街灯の明かりを頼りに、栄太郎は律子のアパートへと急いだ。

その道すがら、いつそ律子と一緒になつてしまえば、誰からも文句を言われなくて済むと、栄太郎は考えたりもしたが、何度か公園で遊んだだけの間柄であり、やはり、支援する者と、される者という心の壁はなかなか自分では取り払えなかった。

（それに、律子の気持ちもあるじゃないか）

そんなことを考えると、栄太郎の心はたくさん絵の具をいっぺんに流し込んだようなグチャグチャの色合いになった。自分ではどうしようもなかった。

同時に律子は自分のことをどう思っているのだろうか、少し不安になる。確かめるには勇気がいる。それを確かめてしまえば、最悪の場合、仕事の関係も行き詰ってしまうのである。栄太郎がただの意気地なしというわけではなかった。

律子の住むアパートは、もう目と鼻の先に迫っていた。宵闇に灯る人家の明かりは暖かい。それは律子のアパートと同じであつた。その安堵感さえ覚える明かりの中でも、律子は不安に怯えているのだろうかと思うと、栄太郎の胸も締め付けられた。栄太郎は自然と駆け出した。

「ごめんください」

律子は栄太郎の声を聞いてすぐに扉を開けてくれた。律子は不安そうな顔を湛えている。あれほど明るかった律子が脆くも壊れそう

だ。健一の無邪気に遊ぶ声が奥の間から聞こえた。

「すみません。わざわざ来ていただいた。さあ、どうぞ」

律子の家は相変わらず小奇麗だった、忙しくても掃除は欠かさないのだろう。ただ、健一の玩具だけが、少し乱雑に散らかっているが、気になるほどではない。健一は奥の四畳半で布団の中に潜りながら、仮面ライダーの人形で何やら遊んでいる。

律子は箆笥から一枚の手紙を出した。それを栄太郎が受け取る。

栄太郎の顔が曇った。

「毎週、日曜日に担当と百日台公園で会っているでしょう。一緒に弁当なんか食べて仲がよろしいことですね。生活保護を受けているのに、担当とイチヤイチャしてはいけませんよ。いい加減にしないで。すべて知っているんですよ。それに働いているでしょう。もう生活保護は打ち切られますよ。市長に通報しますからね」

手紙には汚い文字で、そう書かれていた。

「畜生、一体誰が……」

栄太郎が思わず呻いた。

「心当たりがないんです。私、怖くって……」

律子の肩が震えていた。栄太郎は思わずその肩を抱きしめたい衝動に駆られるが、それをグツと抑えた。

「せっかく前向きに生きていこうと思ったのに……。私、くじけそう」

「こんなことでくじけちゃだめですよ。姿を現さず、こんな手段を使うのは卑怯者のすることです。負けちゃだめですよ。それに市長に通報されたって、佐々木さんが不利益になることはありませんから。生活保護だってそう簡単には廃止になりません」

栄太郎は自分に言い聞かせるように、強く頷いた。律子はまだ不安な顔を隠せずにいる。栄太郎は正直、心配だった。また再び、律子の心が闇に閉ざされてしまわないかと。律子には取り戻した、清らかな心のままでいて欲しいと思う。長年のうちに培われた氷壁のような心を、栄太郎が誠意を持って解かしたのだ。それをまた、厚

い氷に閉ざすわけにはいかなかった。

「北島さんは心の支えなの……」

律子が栄太郎の瞳を覗き込みながら呟いた。だが、その顔がすぐ曇る。

「ごめんなさい。生活保護を受けている、子持ちの女の戯言なんて聞きたくないわよね」

律子が自嘲的に笑った。その悲しそうに笑う瞳が潤んでいた。だが、栄太郎は笑わない。真面目な顔で律子を見つめ返す。

「佐々木さんは私のこと……」

ここまでできたら栄太郎も確かめざるを得なかった。律子の自分に対する気持ちを。栄太郎には確信があった。今までグレイゾーンにいた自信が赤いマグマとなって噴出しそうだった。

「いつまでも苦しいままだと嫌だから言うね。好きです……。愛してしまっただんです」

律子は今にも号泣しそうな顔をしている。不安と熱い想いが入り混じった顔だ。栄太郎は一旦、下を向くと、すぐに律子を見つめた。その瞳が限りなく優しくかった。

「実は僕も、律子さんのことが好きなんですよ。そう、ずっと前から……。いつの間にか律子さんが僕の心を占領してしまっただけ」

ついに栄太郎も素直に自分の気持ちを告白した。肩からスーツと力が抜けていく感覚を覚える。

「ああ……」

律子が栄太郎の胸の中に飛び込んできた。栄太郎がしつかりとそれを受け止める。焦らされた分だけ、想いが募った抱擁であった。

「ママー……」

奥の間から健一の声がした。しかし、栄太郎も律子も抱きあった背中を離そうとはしなかった。

翌日の朝、帰帆市役所の裏口、灰皿の前に栄太郎と高橋係長の姿を見ることが出来る。朝の清々しい空気に紫の煙が立ち昇っていく。

栄太郎が高橋係長を煙草に誘ったのだ。

「どうだった、昨日は」

高橋係長が意味深な笑いを浮かべて、栄太郎に尋ねた。紫の煙が立ち昇っている。

「佐々木律子、自立しますよ。近いうちに生保は廃止します」

栄太郎は缶コーヒーをグイと煽りながら、自信たっぷりな答えを口元には薄笑いを浮かべているではないか。

「ほう……」

高橋係長はビックリしたような顔で栄太郎を見た。今度は栄太郎の薄笑いも意味深と取れないこともない。

「大丈夫か」

「大丈夫です。『市長への手紙』が来ても文句は言わせませんよ」

栄太郎の瞳には力がこもっていた。そんな栄太郎を見て、高橋係長が不安げな表情をする。

「自信たっぷりだな。だが、過信も良くないぞ。足元を掬われないように気を付けるよ」

「ええ……。でも、大丈夫です」

高橋係長の顔が煙草にくすんだ。だが、栄太郎は気にしない。

「そこで係長にお願いなんです、僕と律子の仲人をしてもらえませんか」

高橋係長の目が丸くなり、栄太郎の顔が満足そうに笑った。

「それが果たして自立と言えるのか」

「経済的自立ばかりが自立のすべてではないでしょう」

栄太郎はしたり顔でわらう。高橋係長の頬がフツと緩んだ。

「律子も仕事は辞めませんし、二人三脚で頑張ります」

「そうか……」

高橋係長は二本目の煙草に火を点けていた。フーツと肺の中で濾過された煙を吐き出す。視線は栄太郎に合わせることなく、はぐらかせていた。

「本気か」

「本気です」

栄太郎は高橋係長をまつすぐに見つめる。しかし、高橋係長は栄太郎と視線を合わせようとはしない。

「仲人……、引き受けて貰えますよね」

栄太郎は是非にでも高橋係長に仲人を引き受けて貰いたかった。

この仕事を通じ、高橋係長には、言わば「親父」のような思慕の念を抱いていたのである。

「この先、平坦じゃないぞ」

「わかっていきます。その言葉は結婚式の時にもう一度、聞かせてください」

「生保に転落してきたってことは、それなりに訳有りなんだぞ。それをわきまえた上で一緒になるのか」

「ケースファイルを見れば生活歴からすべてわかってしまいますからね。でも律子は真面目な女性です。生保に転落することが悪いことじゃない。そこから抜け出すためのお手伝いを必死に我々もしているじゃありませんか。人間、悪い時もありますよ」

「くくつ……」

高橋係長が苦笑を漏らした。次の瞬間には、煙草の煙でむせ、ゴホゴホと咳き込む。

「いや、お前に教科書のような答えを返されるとは思わなかったよ。まあ、お前がそこまで言うなら信用しよう。おめでとう。仲人は引き受けるから心配するな」

高橋係長が照れたように笑いながら、栄太郎を見つめ返した。栄太郎は安堵の笑みをこぼす。始業のチャイムが鳴った。高橋係長は灰皿に煙草を押し付け、もみ消すと栄太郎の背中をポンと軽く叩いた。

「今晚、軽く一杯やるか」

栄太郎ははにかむように笑うと、「はい」と頷き、高橋係長と歩調を合わせた。

(3)

最終話（後書き）

ちよつと、特殊な世界でしたがいかがでしたでしょうか？
最後まで読んでくださった方々、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3994i/>

氷解

2010年10月8日15時07分発行